

山根和紙資料館

紙の歴史を伝える学校

(鳥取市青谷町)



石倉優希
永瀬安那



■玄関前の羊の石像。

鳥取市青谷町に山根和紙資料館はある。パツと見ただけではとても資料館のように見えない。なぜなら、建物の外見が学校の校舎そのものなのである。それもそのはず。この資料館は、廃校になった日置谷小学校の校舎を貰い受け、移築・改装したものだからである。

入り口の前で戸惑っていると、この資料館の館長さんが温かく迎え入れてくださった。館長さんの名前は塩伸代さん。とても元気で、お話上手で、学校の先生顔負けのとても的確なアドバイスをしてくださる方だった。

その後、応接間へ通していただいた。大きなテーブルのまわりにいくつかの和紙の作品が展示しており、お土産コーナーも併設されていた。私たちはそこで自己紹介をした後、まずは館長さん自身が資料館を案内してくださることになった。

展示品は日本古来の和紙や世界中の紙、そして紙でできた製品など、紙に関するさまざまなものだった。資料館の入り口に張ってあった世界の紙の歴史年表

を参考にしながら、展示品のいくつかを紹介してゆく。

紙の発明と日本への伝来

紙が発明される前から、人びとは文字を筆記する媒体としてさまざまなものを利用してきた。古代メソポタミアでは粘土板を利用して、西アジアやヨーロッパでは動物の皮を加工した羊皮紙を利用して、インドではヤシの葉を加工した貝多羅が利用され、中国や日本では木簡・竹簡が利用されていた。

西暦一〇五年、中国後漢時代の宦官であった蔡倫が、実用に耐える紙を完成させた。その製法は、細かく砕いた樹皮・麻クズなどの材料を水に溶かし、竹を編んで作成した簀で濾して乾かすものだった。

日本では、五三八年に仏教が伝来した。聖徳太子は、八百万の神々を信仰していた国民の思想を仏教に統一するために、写経を広めようとした。そのために紙と墨が必要となった。六一〇年になって、高句麗から来日した僧曇徴は、中国から紙と墨の製法を伝えた。それだけでなく、碾磑という水力を利用した石臼も造った。これは紙の原料となる麻クズの繊維を細かく砕くために用いたと考えられており、このことが紙づくりの向上につながった。

■狐のお面。これも紙です。





■(左上)百万塔。(右上)紙をこよって作った籠。(下) 貝多羅。

た。

この資料館にも展示されていた百万塔ひやくまんとう陀羅尼だらに経は、七七〇年に作成されたものである。これは日本初の印刷物であるが、その印刷法がどのようなものであったのかはよく分かっていない。陀羅尼とは、本来暗記して繰り返し唱えることによつて雑念を払い、無念無想の境地に至ることを目的としたもので、仏教における呪文の一種だそう。百万塔は、この陀羅尼を納めるための容器である。

流し漉きの確立

八〇六年、朝廷で用いる紙の製造を行うために、官立の製紙所である紙屋かみいん院が設立された。ここで、「流し漉ながき」という新しい紙づくりの技法が発明された。この技法の確立によつて、現在でいう「和紙」が誕生したといわれている。

それまでの紙は、「溜ため漉すき」という

技法でつくられていた。溜め漉きは、簀すきをはめた漉す桁たかへ繊維を溶かした紙料液をすくい入れ、揺すりながら簀の上に平らな紙の層をつくっていく技法である。

流し漉きは、「ねり」と呼ばれる植物性の粘液を混ぜた紙料液を、漉す桁の中へ手前からすくい入れ、揺り動かして余分な水を流しながら紙の層をつくっていく技法である。

流し漉きと溜め漉きとの違いは、ねりを用いるか否かであり、ねりの効果によつて湿った紙でも一枚ずつはがすことが容易となり、薄い紙をたくさん生産することが可能となった。このようにして生まれた薄い紙は、肉太の文字には向かず、小筆で書く繊細な日本独自の仮名文字を生み出すことになる。

このころ使われるようになったのが、



■折形。



■紙布で出来た衣服。

「折形おりがた」である。折形は、平安時代の貴族たちが贈り物をするときに使っていたもので、たとえば赤飯に添えるごま塩包み、香包み、金包み、扇包み、のし包みなどで包み方を変えていたが、そのうち、各家や流派によつて異なった紙の折り方が伝承されるようになったそう。

鎌倉時代のはじめになると、折形は武士によつて使われ始めた。武士が天皇に贈答するときに、紙が白く高価であったことから、武士が天皇に自分がいかに潔癖であるかを証明するために使われた。これが現在の熨斗紙のしがみの源である。

和紙の普及

鎌倉時代の中頃になると、人びとの暮らしの中で和紙はさまざまな用途に用いられるようになった。住居では、行灯や雪洞が普及した。衣服では、紙衣しえが普及した。これは和紙を材料とした着物であり、丈夫で持ち運びに便利なため、武士や俳人が好んで利用していたそう。

資料館には、紙布でできた袴かまども展示さ

れていた。紙布は和紙をこよつて糸をつくり、その糸を織った布である。紙衣とは異なり、軽くて肌触りがよかつたため、女性の夏の衣料として使用された。桐の油で撥水加工しているのので、洗濯可能である。ちなみに『奥の細道』で有名な松尾芭蕉は、紙布でできた着物を着て旅をしていたそう。

室町時代の中頃になると「紙座しざ(紙の市)」ができたため、さらに和紙の生産流通が活発となった。紙が米や木材に次ぐ量で取引されるようになり、扇子屋、傘屋、紙衣屋といった紙を扱う職業も多くなった。また、かわら版や浮世絵などの出版物の発行や、ちり紙などの古紙の再生も盛んになった。このように、和紙は庶民の生活に広く、深く関わっていたのだ。

洋紙の伝来と和紙のいま

一七一九年、フランスのレオミュールは、ハチの巣が木材の繊維でできていることを発見し、木材パルプというアイデアを考案した。アシナガバチが Paper wasp と呼ばれるのは、ここから来てい



■紙布で出来た袴。



■取材中の風景。館長さんの話を聞く。

る。

しかし、このアイデアをフランスで実験した人はいなかった。その後、一八四〇年にドイツのケラーが木材パルプを機械的に製造する方法を發明し、その十四年後には碎木機を發明する。この發明により、木材パルプを大量に供給することが可能となり、ドイツで洋紙の生産が盛んに行われるようになる。

日本に洋紙が伝わったのは、明治維新の頃である。一八七四年、日本で初めて機械による洋紙生産が始まり（原料は木材以外）、一八八九年、木材パルプを原料とした紙（洋紙）の製造が始まった。一九〇〇年には、北海道で国産パルプの製造が始まっている。

その翌年の一九〇一年、日本全国の和紙の生産業者は六万八五二戸を数えている。このころが和紙生産の全盛期であったが、この後、洋紙に押されて次第に減少していくことになる。

資料館には、このころつくられた「紙腔琴」が展示されている。紙腔琴とは、「紙腔」が展示されている。紙腔琴とは、ハンドルを回して空気を送り、オルガンのような音を出す、和紙でできた楽器で

あるが、その当時、さまざまな用途に和紙の利用拡大を図っていたことがうかがえる。現在でもこのような取り組みは継続されており、造形芸術、創作和紙、機能紙など和紙の利用範囲は広がり続けている。

美しい和紙を求めて

資料館を見学した後、私たちは、はじめに通じていただいた応接間で館長さんのお話を伺った。

この資料館の母体となる会社（大因州製紙協業組合）の創業者である塩義郎さんは、十五歳で製紙を生業とする家の跡継ぎとなった。しかし、戦後工業化が進み、旧来の紙漉きをやめてしまおうとまで思い詰めていた。

そんなとき、たまたま山根を訪れた民芸運動の柳宗悦に、義郎さんが漉いた紙を美しいと褒められた。それまでは、紙の厚さや薄さ、値段という即物的な見方でしか紙を見たことがなかった。しかし、紙を美しいと褒められたことにより、紙の美しさに目覚め、美しい和紙を後世

に残していくにはどうしたらいいか、という別の観点から考えることができるようになったそうだ。

その柳宗悦から鳥取の民芸運動のリーダーである吉田璋也を紹介され、吉田璋也

也に型染染の人間国宝である芹沢銈介を紹介された。この芹沢のもとで、念願の美しい和紙を漉く技術を磨いたそうだ。

紙のイメージが変わった！

山根和紙資料館は、一九八〇年に開館した。義郎さんが五十四歳のときである。義郎さんは、自分が紙漉きについて勉強するときにとても苦労されたそうだ。これから紙漉きをしようとしている若手には、そんな苦労をさせまいと考えて、このような施設をたった一人で作った。義郎さんの考えを反映して、館内の展示品からは古今東西の人びとの紙に対する深く多様な思いを汲み取ることができる。

私は、紙は火や水に弱く、すぐダメになってしまうというイメージをもっていた。今回、さまざまな展示品やお話を聞き、そのイメージは大きく変わった。展示品にあった「李朝の紙貼りタンス」は木でできているようにみえるが、名前の通り骨組み以外は張りである。他にも紙でできた「火鉢」や「紙たらい」があった。どれも紙で作るのは不可能だ



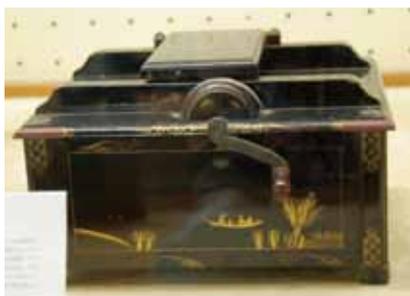
■李朝の紙貼りの衣装箱（上）とタンス（下）。

ろうと思うものばかりで、これも紙でできているのか！と驚いた。紙は、加工しだいで私が思っていたよりずっと強いものになると知ることができた。

是非自分で足を運んで、和紙をはじめとする紙の、長く深い歴史を感じてほしい。きつとみなさんも、紙に対するイメージが変わるだろう。そして、そこから紙の未来を切り開くキッカケをつかんでほしい。山根和紙資料館は、外見だけでなく、人間と紙との壮大な歴史をいまに伝える、まさに「紙の学校」だった。（いしくら・ゆうき／日本語文化系一年生）
（ながせ・あんな／日本語文化系一年生）



■紙製のたらい。



■紙腔琴。

特集

紙

石州和紙に触れる

松本澄美

のんびり雲の編集会議で今年の特集が「紙」だと発表された時、私が最初に思いついたのは「和紙」でした。和紙に書かれた古い文書は味わい深くて好きだったので、その和紙がどこで、どのようにして作られているのか、さっそくインターネットで検索してみることにしました。その結果、出てきたのは浜田市三隅町で作られている「石州和紙」。どんな和紙なのかと興味を持った私は、石州和紙について取材をすることに決めました。

石州和紙の里へ

七月三十日、午前六時半。私たちは半分眠ったまま松江を出発しました。向かうのは浜田市三隅町古市場にある石州和紙会館。三隅中央公園の中にあり、桜の大木の材で造られた趣のある看板が目印となっている建物です。この和紙会館は平成二〇年一〇月にオープンし、石州和紙の技術・技法の研修や情報発信、オリジナル和紙の製造や商品開発などを総合的に担っています。

まだ新しく、温かみのある施設の中へ

入ると、図書館のような重厚な香りがし、和紙で作られた様々な工芸品が展示してありました。展示室の奥には会議室と事務室があり、今回取材をさせていだきたく久保田彰さんが私たちを出迎えてくださいました。久保田さんは石州和紙協同組合の代表理事であり、石州半紙技術者会の副会長も務めていらつしやいます。まずは会議室で石州和紙について説明していただきました。

石州和紙は、楮こうぞ、三椏みつまた、雁皮がんびと呼ばれる三種類の木の皮を原料として作られています。

楮は繊維が長く絡みやすい性質を持っているので、強靱な紙ができます。楮紙は昔から商人の大福帳や障子紙などに用いられてきたそうです。三椏は柔らかく光沢のある紙ができるので、お札をはじめとする印刷物や書道用紙に適しているそうです。雁皮は繊維が半透明で光沢があり、しかも粘着力があるので、光沢があつて薄い高級紙ができます。雁皮紙はまた、湿気や虫の害に強いともいわれています。

昔から浜田周辺で作られてきた楮一〇〇パーセントの紙は、「石州半紙」と呼ばれてきました。伝統和紙の衰退に危機感を抱いた文化庁は、日本全国を調査した結果、昭和四四年（一九六九年）石州半紙と本美濃紙の二つを、国の重要無形文化財（工芸技術、手漉き和紙）に指定しました。石州半紙の伝統技術・技法の保護と後継者の育成を目指したのです。

無形文化財となった石州半紙は、原料（楮）や道具、補助剤から漉き方まで規定が設けられました。この規定からはみ出した和紙は、石州半紙とは名乗れないのです。

そこで、三隅における和紙事業の規模拡大を目指して、新たに「石州和紙」というブランドを立ち上げました。石州半紙の規定外の材料や作り方を用いて漉いた和紙を「石州和紙」と呼ぶことにしたのです。平成元年（一九八九年）には、この石州和紙が「伝統工芸品」の指定を



■雁皮、三椏、楮、補助材料のトロロアオイ。



■(上段)和紙のクッション。
(下段)和紙製のオロチの頭。

受けています。この石州和紙はハガキや便箋から様々な紙製品まで、利用範囲を大きく拡大することができます。

和紙会館の中にある展示スペースには様々な石州和紙が展示されています。楮、三桧、雁皮、それぞれの材料で作られた和紙は、厚さ、触った感触や透明感などがすべて違っていました。また、色がついていたり模様が入っていたりと、色々な種類の和紙ができるものなのだと感じました。

展示品の中で私が驚いたのは、和紙で作られた加工品の数々でした。コースターやクッション、さらには服まで…。すべて和紙で作られていたので、紙は水に濡れたり、何度も折り曲げたりすると破れてしまうというイメージがあったので、こんなにたくさん使った道があったなんて思ってもみませんでした。

和紙作り体験

石州和紙は、たくさんの方を経て作られます。これらの工程を表に示しておきました。原木が和紙になるまでには、

本当に長い時間と手間がかかっているのだと、改めて驚きました。

石州和紙会館では実際に和紙作りを体験することが出来ます。私たちも「抄造」という工程を体験させていただきました。

松でできた「漉き桁」に、竹を絹糸で編んだ「漉き簀」をはさんで紙を漉きます。抄造の工程には「敷子」「調子」「捨水」という三段階があります。敷子は紙料をすくい上げること。調子は紙料を深くすくい上げ前後に動かしながら、繊維を絡み合わせる。捨水は簀の上の余った水や紙料を一気にふるい捨てることです。

初めに久保田さんから指導を受け、そ

の後、自分で紙を漉きました。敷子は良い角度で紙料をすくい上げないと、すぐにしわができてしまいます。すくい上げるだけで簡単だと思われるかもしれませんが、しわにならないようにすくい上げるのは至難の業です。

調子では、平らに動かさないと厚さが変わってしまうので、絶妙なバランスが必要。私は、手首がカチカチになつてしまうので、力を抜いて、紙料の動きを見ながら動かすのがポイントだと教えていただきました。

最後は捨水。これが難しい！私としても不器用なので、二回も失敗しました。前に押し出すようにと、コツを教えてください、やっとなこと成功しました。

石州和紙製造工程

原料栽培	楮・三桧は地元の畑で栽培されたものを使用し、雁皮は野生のものを使用する。
原木刈り取り	12月から1月にかけて行われる。
原木裁断	刈り取った原木を1メートルくらいに切り揃える。
原料蒸し	蒸気によって蒸す「せいろ蒸し」と呼ばれる方法で、木芯(木材)と表皮を剥がれやすくする。
木口叩き	根元を槌で叩き、原木と表皮を分離しやすくする。
原木剥ぎ	木芯と表皮を剥がす。
黒皮乾燥	剥いだ黒皮を束にして、自然の風に当てて乾燥する。
黒皮そぞり	乾燥させた原木の表皮の黒い部分を1本ずつ包丁で丁寧に削る。楮の強靭さを出すために表皮と白皮の間をあま皮部分を残す。
水洗	不純物を洗い流す。
煮熟	木灰かソーダ灰を加え2時間ほど煮る。
塵取り	清水の中で一本一本付着している塵などを取り除く。
叩解	堅い木の板に原料を乗せて槌で叩き、繊維を砕く。
抄造	漉き舟に水と紙料、トロロアオイを入れ、混ぜ棒によって均等に分散させる。その原料液を竹簀を挟んだ漉き桁ですくって和紙を漉く。
紙床移し	漉きあげられた簀の上の和紙を紙床台へ移動する。
圧搾	圧搾機によって圧をかけながら水を切る。
紙床剥がし	よく絞られた紙を一枚一枚剥がす。
干板貼り	剥がされた湿紙を刷毛で銀杏の干し板に貼りつける。
乾燥	貼り終えた干し板を天日によって乾燥する。



■(左)和紙について説明して下さる久保田さん。(右)和紙のこよりを編んで作られる服を紹介して下さる倉井さん。

久保田彰さんのお話

石州和紙を代表する職人であり、また石州和紙の振興を中心に、なつて担っている久保田彰さんに、ご自身のことについてお話を伺いました。ご多忙にもかかわらず、私たちの質問に丁寧に答えてくださいました。

久保田さんが和紙作りの道を志した背景には、石州和紙の第一人者である父・保一さんの存在がありました。保一さんは、昭和二十一年から手漉き和紙を作り始め、昭和五三年にはアメリカで海外初の手漉き和紙の実演と講演を行いました。また、昭和六一年からブー



■「調子」の手本を見せて下さる久保田さん。

タン王国へ自ら足を運び、調査や技術指導を行ったりするなど、石州和紙の継承と発展に大きく貢献しました。

そんな偉大な父を持つ彰さん。将来、和紙職人になろうとは考えていなかったそうです。しかし、東京の大学に進学して、たくさんの方と出会ったことから和紙の素晴らしさを教えられたそうです。大学三年生の時、自分でも和紙作りをしてみたいと考えるようになり、卒業後地元に戻って和紙作りを始めました。そのとき、良い手本であり師匠となったのは、父の保一さんでした。

彰さんが島根に帰って間もないころは、石州和紙が良いと言われる理由が分からなかったと言います。しかし、和紙を作り始めて二十年経った頃、地元産の楮と三隅川の水を使った石州和紙の品質の良さに改めて気づき、このような風土が今でも残っていることに誇りを持つ



■和紙作りの道を選んだきっかけや和紙作りへの情熱を語って頂きました。



■水気を絞った紙を鉄板に貼り付けて乾かします。

たそうです。

また、「自分が作った紙を」使う人と直接触れることが出来ることも魅力ですね」とも話してくださいました。紙の作り手と使い手は、昔は問屋を介していたためにまったく接点がありませんでした。しかし平成になって、製造元が客に直に商品を売ることを始め、作り手と使い手が直接繋がりを持つようになりました。作り手は、使う人のことをイメージして、その人に合った和紙を作成することができるようになったのです。

彰さんによると、「使い手をイメージして和紙を漉けば、自然とその使い手に合った和紙が出来る」そうです。これが職人技なのだ、と思わず「すごい！」と声を出していました。

今、久保田彰さんが力を入れているのは、石州和紙の後継者と伝承者を育成することです。久保田さんがおっしゃるには、後継者とは、石州の地で石州和紙を作り続けていく人のことです。伝承者と

は、石州以外の地からやって来て、石州和紙作りを学び、石州以外の地で和紙を作っていく人のことです。

本来、和紙作りをしている家族から後継者が出て、和紙作りは一子相伝で伝えられるものですが、久保田さんたちは、島根県外だけでなく、海外からも和紙作りを学ぶ人を受け入れているのです。石州和紙の良さを活かして、それぞれが自分の地でその地の紙作りをする。このことが、長い目で見れば石州和紙の発展につながると思っています。自分のところだけが良ければそれでよい、という狭い考えではないのです。私は、ここでも感動してしまいました。

とても若々しく活気あふれる久保田さんは、現在六十一歳。今後の夢について伺いました。「今と同じように紙漉きをするつもりです。そのためには、父がしていたように、三隅を石州和紙の産地として育てていくことと、後継者や伝承者を育成することが、私の使命だと考えています」と力強く語ってくださいました。素晴らしい技術者であった父の保一さんの意志を受け継いで、ご自分の事業所の

発展だけでなく、石州和紙の産地全体の形成と活性化を願っていただけることをひしひしと感じました。

石州和紙会館で取材をして、久保田彰さんにはたくさんのごことを教えていただきました。ものすごい手間と時間をかけてようやく和紙ができること。和紙を漉く職人さんの技のすごさ。和紙が秘めているたくさんの方の用途。石州和紙は、私が想像していた弱い紙とはまったく違っていた、とても力強い和紙でした。そして、広く世界に伝承者を育てることを通して、世界全体に和紙文化を伝え、同時に石州和紙の発展を図るという考えには、素直に感動しました。今後、ますますたくさんの方々に愛される和紙になっていくことを心から願っています。

(まつもと・きよみ／英語文化系二年生)



■(上段)「敷子」。(中段)「捨水」。(下段)「紙床移し」。



■和紙の完成！



ノート制作

吾郷屋さん

野口詩織
石田晶子

出雲市平田町の中でも、特に木綿街道と呼ばれる通りは、江戸時代から明治時代にかけて雲州木綿の市場町として栄え、現在でも塗壁造の町並みが残っている風情溢れる街です。そんな昔の面影を色濃く残す木綿街道の西端に、今回取材をさせていただいた吾郷さんの作業場があります。

作業場といっても、それは吾郷さんが昔住んでいた家です。町家特有の間口が狭くて奥に長い造りで、中庭もあり、とても落ち着く家でした。通りに面した一室を使った作業場には大きな窓があり、外から作業している様子を覗き込む子どもたちもいました。

そんなゆっくり時が流れる、のどかな場所です。吾郷さんはノート作りをしておられます。吾郷さんのノートを初めて見た

とき、想像していたよりずっと分厚くて、ノートというよりハードカバーの本という印象を受けました。

吾郷さんとノート

吾郷さんは現在サラリーマンとして働き、その多忙な生活の合間を縫ってノート作りを行っておられます。普通のサラリーマンである吾郷さんがなぜノートを作っておられるのでしょうか……。吾郷さんのノート作りのルーツは、かなり幼い時期までさかのぼります。

吾郷さんは幼稚園の頃から「紙の束」というものが大好きで、ホッチキスを使って絵本を作ったりしていたそうです。銀行でもらったメモ帳を手にしただけで有頂天になるほどの「紙の束」好き。小学生になって初めて「自由帳」を見た



ときの衝撃は忘れられない。この白い紙には何でも書くことができる！自分の好きなものを好きなように書ける紙は、まさに夢のようなものだったそうです。

そんな吾郷さんが初めて本格的なノートを作ったのは平成十八年頃のこと。いつも使っている手帳を見て、どうせ使うなら自分の好きなものを使いたいと、布張りのハードカバーの手帳を自分で作ったそうです。その手帳を見た知り合いから頼まれ、同級生の結婚式にメッセージ集を作ることとなった吾郷さんは、そこ

で製本の楽しさを知り、以来ずっと続けているそうです。

白紙を常にそばに置いておきたいという欲求と、サイズ、手触り、素材、表紙、花布、葉など、すべてをオリジナルで作ることができたら楽しいだろうという好奇心が、吾郷さんをノート作りの道に導いたそうです。

ノートの作り方

私たちは早速、吾郷さんからノートの作り方を教えてもらうことになりました。製本方法は大きく分けて上製本と並製本の二種類があります。今回私たちが吾郷さんから教えていただいたのは上製本（ハードカバー）の作り方でした。

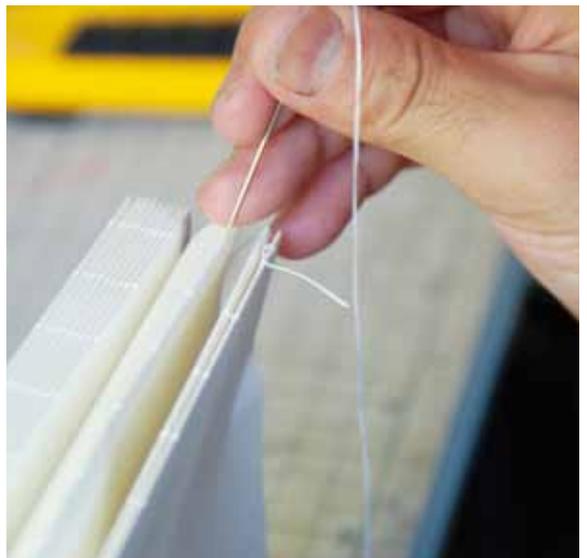
まずはノートのページとなる白紙を束ねて糸で縫います。糸には蜜蝋を塗り、糸の毛羽立ちをなくします。糸の縫い方にも吾郷さんのこだわりがあり、オリジ



■断裁機で紙の束を切る吾郷さん。

ナルの縫い方をしていてそのうなのですが、それは企業秘密なのか……。

縫い終ると次に見返しを貼ります。そして背の部分に寒冷紗を貼ります。寒冷紗とは、目の



■白紙を縫い合わせる。吾郷さんオリジナルの縫い方です。

粗いガーゼのようなもので、寒冷紗の網目が白紙の束の背の凹凸にくっつくことで背が強くなるのだそうです。寒冷紗を貼った上にさらに石州和紙などを貼りま

す。ここまで終わるとできあがったものをガラスの板で挟み、クリップでとめて一日置いておくそうです。その後に、背にクラフト紙を貼ります。

粗いガーゼのようなもので、寒冷紗の網目が白紙の束の背の凹凸にくっつくことで背が強くなるのだそうです。寒冷紗を貼った上にさらに石州和紙などを貼りま

個性的なデザイン

吾郷さんの表紙のデザインはとても個性的かつ繊細です。色紙を細かく切り抜いたものや、色違いの紙を切り抜き、はめ込んで組み合わせ

せたもの、藍染めなどを施した布を使用したものなどがあります。

一番驚かされたのは、新聞の写真を切り抜いて絵を作るといったものでした。これは、実際に写真に写って

らなければ紙が水分を吸ってしまふため、技術が必要となつてきます。

角背の場合はありますが、丸背の場合はありません。吾郷さんの場合は、紙の束を捻って背を丸くして丸背をつくるそうです。

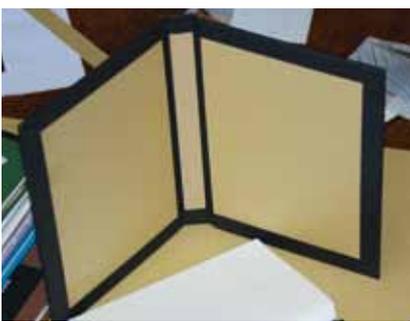
細かい作業をしながら、何日もかけて一冊のノートを作り上げる。これはノートが本当に好きな人でなければできないと思います。吾郷さんの「作るからには完璧なものを作りたいたい」という気持ちと、

いるものとは全く異なる絵になりそうな部分を見つけ出し、切り出して表紙に使うというものでした。私たちも実際に作品に使った写真と切り抜いた部分が使われている表紙を比べながら見させていただいたのですが、どこの部分がどう使われているのかわかりませんでした。

しかし、吾郷さんは新聞を読んでいるとき、自然と写真が別の絵に見えてしまうとのことでした。私たちは吾郷さんの感性とひらめき力に驚嘆させられました。そんな吾郷さんの作るノートはどれもオリジナリティーに富んでいて、機械で作ったものとは違い、温かみを感じられる作品です。

ノートに対する想い

「いつも傍らに白紙のページをもっていたい。手に取るたびにニヤリとしてしまふ」というコンセプトのもと、ノートを作っている吾郷さん。たくさんの人にもっとノートを使ってほしい、ノートに



■（上段）角背の表紙。（下段）背を縫い終わった白紙とそれに見返し・花布・葉をつけ、寒冷紗・和紙を貼ったもの。

■ (右) ボール紙についての説明を聞いています。
 (下) このノートの表紙は細かい模様が切り抜かれています。すべて吾郷さんの手作業です。



今まで私はノートをそんなふう考えたことがなかったので、吾郷さんのこの言葉が新鮮に感じられ、私の中のノートに対するイメージが変わっていくような気がしました。

は手書きの良さがあるとおっしゃっていました。パソコンでは文字は何回でも書き直せるけれど、ノートにペンで書いた文字は消すことができません。なかには最初のページに書いたことが気に入らなくて、そのままそのノートを使わなくなってしまう人もいます。良いことも、悪いことも、感情のまま書いてしまったことも、ノートはその時の「自分」をすべて記録します。でも、ノートをめぐる機会があれば、たまたま目に留まったページを通して過去の自分に出会うこともあります。それで視野が広く持て、後に活かせるかもしれない。——吾郷さんはこのように言っておられました。



■吾郷さんのノート作りの作業場。芸術的な雰囲気があります。

「手作りならではの、愛着のあるものが作りたい」とおっしゃっていた吾郷さん。忙しい仕事の合間を縫って作られる作品は、年間に三十冊ほどです。「ノートは好きで作っている。しかし作品はプライドをもって作っている」と言っておられた。話しておられるその眼はとてまっすぐで、真剣なものでした。

吾郷さんの作品は、時々開催される個展や、陶芸など他の分野で活躍している作家たちと合同で行うグループ展で出会うことができます。このほか、松江市上乃木にあるDOORというお店に置いてあります。機会があればぜひ一度行ってみてほしいです。

吾郷さんには今回初めてお会いしまし

たが、吾郷さんの「紙」に対する思いに、私たちは圧倒されてしまいました。

私たちにとっても身近なものである「ノート」。しかし、その使い方は人によっても、目的によっても異なります。吾郷さんがおっしゃっていたように、ノートは無限の可能性を秘めているものだと思います。

今の私たちの生活は、パソコンや携帯電話の普及によって、紙にペンで書くという機会が少なくなっています。昔はノートに書いていた日記なども、今ではブログやツイッターなどといったものに変りました。

しかし、ノートはパソコンと違って、すぐに望むページを探し出すことはできません。ページをめくり、自分の求めている情報を探さなくてはなりません。そのとき、自分の求めている情報でないものも自然に目に入ってきます。そして、過去の自分が書いたものから、私たちは思いがけず何かを学ぶことができるかもしれません。そんな予測もできないようなところが、ノートの魅力なのではないでしょうか。

(のぐち・しおり／日本語文化系一年生)
 (いしだ・しょうこ／文化資源学系一年生)





想いを紙に 書道 若月響子さん

植原尚子

『うん、何?』と聞いて思い浮かぶのは、あの毛筆で書かれた特徴的なタイトル文字ではないでしょうか。二〇〇八年に公開された映画『うん、何?』は、島根県出身の錦織良成監督が雲南市を舞台に制作されたものです。実は、この映画のタイトルの文字を書いたのは松江市在住の書道家の若月響子さんという方です。

この文字を書かれた若月さんとはどのような方なのか? この題字に込められた意味、書に対する想いは? 今回、私はそんな気持ちでお話を伺うことにしました。

若月さんと書道

若月さんはお母さんが書道の先生だったこともあり、幼いころから遊び感覚で気の向くままに筆を握っていたのが書道に入るきっかけだったそうです。そのまま小学校から高校まで書道を続けていましたが、大学進学の際、なんとなく続けてきた書道の道に本格的に進もうと決めました。大学では書道専修コースを選択し、一日の半分を書道の勉強に費やします。このときに書道の技術以外にも、基本となる理論を深く勉強したそうです。

そんな若月さんの書道に対する意識が大きく変わったのは卒業研究でした。課題は臨書と創作とかな文字の三つです。臨書とは中国の古典的な書を手本にして行う練習で、書道の基礎になります。若月さんは創作の課題に金子みすゞの詩を選び、それまで書いたことのない大きな



■『うん、何?』の文字の制作秘話を語る若月さん。

作品に挑戦しました。ですが、そのとき書きあげた作品は、自分では見ることでできないくらいスカスカの作品と感じ、落胆したそうです。そして、自分の書道は何を拠り所にしたらいいのか考え直したとき、基本になるのは古典の臨書、習字の基になる古典からの集字だと気付きました。また、かなは苦手だった若月さんですが、空間の使い方がとても面白い人がおり、かなは構成だということを見つけたそうです。

その後、大学を卒業し、島根に帰ってきて就職し、書道は趣味として続けてきました。年に一回は島根県の展覧会に作品を出展し、賞をもらったりもしましたが、周りから評価される反面、自分自身が納得できる文字を書くことができず、力がないことを実感したそうです。そんなとき、作品を見た恩師の先生に「下手



■タパタパの店内。

「なったような気がする」と言われたことがきっかけで、その先生の下で再び勉強を始めることを決めました。また、自らも高校の講師として書道を教え始めました。

『うん、何?』との出会い

そんな若月さんが『うん、何?』のタイトル文字を書くきっかけとなったのは、「しまね映画塾」への参加でした。しまね映画塾は、一般の人が映画の製作を体験し、映画への理解をよりいっそう深めようというワークショップで、二〇〇三年から行われています。塾長は、当時『白い船』で脚光を浴び始めていた錦織監督です。若月さんはこの映画塾ではカメラマンをやったのですが、なぜかタイトルの「そら」という文字をお母さんに頼んで書いてもらい、映画の画面の中に筆の文字が映えていてとても素敵だと感じたそうです。そのとき、若月さんが書道をしていることを錦織監督も知っていて、『うん、何?』のプロデューサーの方から声をかけられることになるのです。そして、「地元を盛り上げたい」という気持ちから、題字の制作を引き受けたそうです。

若月さんの書はまず設計図を書くことから始まります。どんな効果を与えるか、どんな技法にするかを決め、理想とするゴールにどういうふうにしたら行きつくのかを考えます。「うん、何?」の場合には見る人に疑問を持たせるため、流す文字ではなく、一つひとつの文字に力を入れて書くことに重点を置いたそうです。

一見、一気に書かれたかに見えるあの文字も、実は逆筆という技法を使い、直線を意識して書かれています。「何」という漢字は気を引くために右下がりになりました。書道には本来ないものである「?」は、どうしたら不思議な感じに見せられるか、こだわったそうです。

こうした流れで次に頼まれたのが「B A T T A D E N」です。筆でアルファベットの書くことに最初はとも抵抗があったと話しておられました。漢字は意味が

あるからそれを想像して書けるけれど、アルファベットは音だけで核になるものがあります。そのため書き始めるのに時間がかかったけれど、この映画に携わる人をイメージして、大きき、間、カーブ、丸さを意識して、暖かみのある文字を書こうと思ったそうです。

書道のスタイル

姿勢は、大きい紙の場合、立ったり、片膝を立てたり、時間は深夜二〜三時の時間帯、心を落ち着かせて紙に向かうのが若月さんのスタイルだそうです。紙は和紙ではなく、中国の「紅星牌」を使います。和紙より薄く、つるつるとしているところが特徴で、一枚何百円もする高価なものです。若月さんはこれでも手頃な方だと言います。紙に関しては、こだわったら本当にきりがいいそうです。墨は紙との相性を見ながら濃さを変えていきます。書道

は費用がかかります。お金のことを考えると怖くなるので、考えないようになっているそうです。

若月さんは「想いを形にしたくて……。私の場合はそれが書道だった」と言っておられました。ですが、「自分の思ったことを思ったときに書ければいいけど、私にはまだまだそのスキルは身に



付いてなくて、まだまだ勉強しなければいけない」と、自分自身を冷静に見つめ、常に精進されている姿が印象的でした。また、そのためには

裏の仕事となる臨書を大切にし、基礎を磨いていくことを心がけていきたい、そして、いつかは自分だけの表現方法である創作をしていきたいとおっしゃっていました。

最初は穏やかな雰囲気印象的だった若月さんでしたが、書道のことを語り始めると表情や口調が変わり、書道に対する強い想いを感じました。それでも、今後の書道について「なんとなくやっていくたらいかな……」と、のんびりと語る姿もあります。若月さんの作品の雰囲気はこんな若月さんの人柄から作られているような気がしました。

今回お話を伺ったのは、若月さんが友人と経営しておられるカフェ「タパタパ」です。このカフェも若月さんが「想いを形に」した一つの作品です。今後も、さまざまな「表現」を続けていく若月さんに期待したいです。

(うえはら・しょうこ／文化資源学系二年生)

*この頁と次の頁に掲載した書「雲」と「紙」は、今回、若月さんが『のんびり雲』のために書いてくださったものです。「紙」は特集の柱にも使わせていただきました。



■タパタパのドア。

和

山陰のかまぼこ大試食会

藤間奏伽



日本海に面しているここ山陰では、様々な水産加工品が生産されています。今回はその中でも練り製品に着目しました。六月二三日の昼過ぎ、お腹をすかせた私たち二〇人は部活動室に集合し、全部で二三種類の練り製品を試食することになりました。わさび醤油が欲しいという人のために、授業で見学にも行ったカネモリ醤油の「七年熟成」を用意しました。



山陰の練り製品と言えば、出雲地方の「あご野焼き」や鳥取の「とうふちくわ」などが知られています。この他にもおいしい練り製品がたくさんあります。試食の感想を交えながら紹介していきたいと思います。

とうふちくわ

鳥取では有名なとうふちくわ。でも出雲育ちの私は、この試食会をするまで、どんなものか知りませんでした。そんなとうふちくわですが、歴史をさかのぼると、なんと江戸時代にはすでに存在していたそうです。当時、魚のすり身は高級品だったため、安価に入手できる豆腐を使用してちくわを作るようになったのだそうです。試食会では、ちむら（鳥取市）のとうふちくわを食べてみました。



木綿豆腐七〇%、白身魚三〇%でできています。そのため見た目も真っ白で、「まさに豆腐」といった感じですが、食べると感想はというと、それもまたほとんど豆腐なのです。香りは練り物の香りがするのですが、口に入れると「おお!? 豆腐か……いや、ちくわ……豆腐……」という具合です。食感が柔らかく、普通のちくわよりふわっとしているので、お子様やお年寄りの方に良いかもしれませぬ。「醤油を付けて食べるとサザエの味がした」という人もいました。これは試してみれば価値がありそうですね。

長芋かまぼこ

この試食会では、あぶい蒲鉾（琴浦町）と高塚かまぼこ店（琴浦町）の長芋かまぼこを試食しました。「何故かまぼこ長芋？」と疑問に思うところですが、鳥取県中部は長芋の産地であることから、長芋かまぼこが生まれたようです。長芋はかまぼこに練り込んであるのかと思





きや、長芋の周りにすり身が巻いてあるのです。これには一同驚きました。また、長芋特有のねばねばがなかったことにも驚いていました。

試食の感想は、あぶい蒲鉾のはサクツとしていて、さつぱりしている感じ、高塚かまぼこ店のはぎつしりと身が詰まっ
ていて、食べごたえがある感じでした。
同じ長芋かまぼこでもやはり違いはあり、好みは人それぞれです。全体的に、「別々に食べたいかも……」という感想
でした。それでは意味がないのですが
……。しかし、長芋が好きなた人にはぜひ
食べてみてもらいたいかまぼこです。

鬼太郎かまぼこ

可愛い鬼太郎たちが目を引く一品です。見た目だけでテンションが上がります。みんな「可愛いー」と言っていました。寿山商店（松江市）のもので、キャラクターごとにそれぞれ、鬼太郎にはチー
ズ、目玉おやじはイカ、ねずみ男はサラ
ミが入っています。串に刺さっていると
ころもまた、おもしろいかまぼこです。

食感はどれも弾力があって、プリッと
しています。肝心の味ですが、ダントツ
で人気だったのはチーズの入った鬼太郎
でした。「チーかまみたいでおいしい」
という感想が多かったです。イカの入っ
た目玉おやじは、味よりもイカのコリコ
リした食感を楽しんで食べるかまぼこで
した。サラミの入ったねずみ男のかまぼ
こは、一回普通のかまぼこだ！でした。

見た目もさることながら、いろいろな
味と食感が楽しめる鬼太郎かまぼこ。山
陰の旅のおみやげにぴった
りですね。

あご野焼き

山陰ではトビウオのことを「アゴ」と言います。五月から八月の頃にかけて山陰沖で漁獲できるのがこの魚で、島根の県魚に指定されています。昔から、アゴをすり身にして焼いた「あご野焼き」は名産品として親しまれています。

野焼きがいつ頃から食べられるようになったのかははっきりしません。しかしその名は、外で焼いていた様子を見た松江藩主・松平不昧公が付けたとも言われています。もしそうなら、その頃にはすでに存在していたのですね。

歴史ある「あご野焼き」ですが、近年はアゴ一〇〇%のものは少なくなり、値段も高くなっているのです。とても残念ですね。しかし今回はその高価な、アゴ一〇〇%の野焼きを試食することができ

ました。青山商店（松江市）の「炭火焼あご野焼き」です。そしてもう一つ、長岡屋（松江市）の「茂助のやき子ジャ
ンボ」（アゴ七〇%）も食べました。

一〇〇%の方の感想は、「香りは普通なのに、味わいがあったておいしい」といった感じでした。食べた後のしつこさなどはなく、淡白な感じで本当に食べやすいと感じました。「食べた後になぜか、本物を食べたという充実感がある」と言っている人もいました。

茂助の野焼きは、やはり、「いつもの野焼き」「食べ慣れている感じ!!」という感想が多かったです。一〇〇%のものとは比べると味が濃くて、食べごたえのあるのがこの商品です。皮もしっかりとしていました。どっちが好きかは個人で違うので、あとは好みの問題でしょう。



スト巻き（糞巻き）

これはおもしろいかまぼこで、周りにストローが巻いてあります。元々は麦藁で巻いてあったようですが、現在ではプラスチック製のストローが使われています。糞巻きとも言いますが、普通の呼び名の方です。製造方法は、焼くのではなく蒸してあるのがポイント



です。今回は青山商店の製品、「初雪」を食べました。

あっさりした味で、飽きが来ないかまぼこという印象です。食感も柔らかいけどプリツとして食べやすい、万人受けするかまぼこかもしれないですね。「わざわざ醬油で食べるとなおいいそう良い」と、シンプルに味を楽しみたい人もいれば、「料理して食べたい、料理の材料に使いたい」という人もいました。

燻製かまぼこ

これは簀巻きを燻製にしたものです。試食したのは長岡屋の「茂助くんせい」です。かまぼこの燻製というのは食べるのはもちろん、見るのも初めてだったのでも、とても興味深かったです。真空になっているパックから出した瞬間に、「あゝ、



燻製だ」と感じるくらい香りが燻製でした。色が白ではなく、全体的に茶色くなっているのも特徴です。そして、見た目の割に値段が高いというギャップを持ったかまぼこでした。

これが意外にも好評で、「おいしい」という声が多かった商品です。「これはかまぼこなのか？」と思ってしまうほど弾力があって固かったです。しかし噛みごたえがあり、噛めば噛むほど味が出るかまぼこです。皆さんに一度は食べてもらいたいかまぼこでした。「お酒に合うかまぼこ第一位だ」と、みんな言っています。

しじみのやき

小川かまぼこ（松江市）の商品で、六道湖七珍のひとつとして有名なしじみを生姜で煮込んだものとしじみ汁をすり身に練り合わせたかまぼこです。かまぼこにしじみを入れるとは、おもしろいことを考えるなあ。いかにも島根の特産品という印象を受ける商品ですね。県外の、



しじみになじみのない人は余計そう感じられるかも。

さて味ですが、「若干しじみかな」という感じですが。かまぼこの中にしじみの身が入っているのです、その食感を楽しむのがいいかもしれませんね。予想外の味わいや驚きを求めてはいけません。

ゆずしんじょ

これも小川かまぼこの商品です。魚のすり身に長芋と卵白を擦り込み、柚子を入れたしんじょです。これもまた斬新な組み合わせで、食べるまでは想像のつかない商品です。香りがかまぼこではなく柚子であったことから、更に興味深くなりました。

肝心な味ですが、「柚子です!!」。しかし、あとからちゃんとかまぼこに戻ってくる、という不思議なかまぼこです。風味が爽やかで、さっぱりしているのが特徴的でした。夏の暑い時期にぴったりといった感じでしょうか。

赤てん

赤てんは、浜田市で作られるようになった練り製品だそうです。この試食会で食べたものは江木蒲鉾店（浜田市）の商品で、六〇年もの歴史を持っています。



す。魚のすり身に唐辛子を練り合わせ、パン粉をつけて揚げてあります。唐辛子が入って、赤みを帯びているのが特徴です。

唐辛子のピリツとしたアクセントが利いていて、これだけ食べても十分に楽しめる味でした。揚げたため、ちよつと油っぽさがあるところが、ご飯のおかずとしても合いそうです。みんなの感想は「お酒のおつまみ」が多かったです。他の練り製品と違ってパン粉が付いているため、食感がざらつとしていてこちらもおもしろいと思います。

試食会をやってみて、練り製品ひとつとっても種類が豊富で、味もそれぞれ違い、とても奥が深いものだとわかりました。今回試食した製品以外にも、山陰にはまだまだたくさん練り製品があります。これから新しい発見をするのも楽しいかも、と思いました。山陰だけでなく、他の土地の製品と比べてみるのも楽しいかもしれませんね。

（とうま・かなか／文化資源学系二年生）

島根県川本町

バクでまぢおこし

山内智恵

島根県東部や鳥取県を『のんびり雲』の取材地域に選ぶ人が多い中、島根県西部出身の私は、県西部のネタを記事にしたいと考えていた。そこで選んだのは、邑智郡川本町。私が高校三年間を過ごした思い出の地だ。

川本町は島根県のと真ん中に位置し、

江の川が流れる山深い地域だ。「平成の大合併」が進む中、編入や合併をせず単独町政を行っている、人口約三八〇〇人の小さな町である。

私は、川本町のホームページで「**猿頭さげしやうの玉枕ぎょくちん**」という珍しいものがあることを知り、興味を持った。また、**猿でまぢおこし**をしている三宅幸恵さんという女性がおられることも知った。これらの二点を手がかりにして、川本町の魅力を探ることにする。

珍宝が眠る長江寺

八月一七日、松江から車で二時間。蛇のようにクネクネとした細い道を抜け、長江寺という寺に到着した。長江寺は曹洞宗の寺で、五二〇年前に建立された。寺の前には湯谷温泉弥山荘がある。

ドキドキしながら中に入ると、方丈曹洞宗では住職のことを「方丈」というの奥さんが迎えてくださった。私が取材

に来たことを伝えると「奥にありますけえ、まあどうぞどうぞ」と、挨拶もそこに早速、珍宝「猿頭の玉枕」がある部屋に案内してくださった。

その珍宝は木箱に入れられ、小笠原長隆公の像と並べて置かれていた。枕と言っても木彫りで、猿の顔をかたどった器になっている。ふたを開けると……なんと本物の(?)猿の骨が! きちんと歯も付いていた。

この「猿頭の玉枕」は、おそらく中国で作られたもので、しかも猿の骨が入っている。このような珍品は、日本中を探しても、やはり長江寺にしかないそうだ。まさにお宝中のお宝なのだ。

猿には「悪夢を食べてくれる」という伝説があり、古くから中国では空想上の幻獣とされている。では、動物園にいる「バク」は何者? その正体は、マレーバクやアメリカバクである。これらは形態が伝説の生き物「猿」と似ていたため、



「猿(バク)」と名付けられたと言われている。

「猿頭の玉枕」は猿の顔をかたどって立体的に作られているが、上部だけは平らになっており、枕として使用できるようになっている。小笠原家の歴代の武将たちは出征する前に実際にこの枕で眠ったそう、枕の平らな部分はすり減っていた。

また、枕が納められている木箱は、「難を転じる」という意味を込めて南天の木で作られているそうだ。武将たちは、猿に悪夢を食べてもらい、戦への不安を取り除こうとしたのだろうか。武将たちにとって猿頭の玉枕は、ただの珍宝ではなくお守りとしての役割も果たしていたの





かもしれない。

小笠原氏と猿頭の玉枕

長江寺三八代目方丈の吉村昇道さんが『小笠原史記』と『石見小笠原氏遺跡保存主意書』という古い書物を読みながら「猿頭の玉枕」の歴史について説明してくださった。

小笠原長隆は石見小笠原氏の武将で、川本の地を治めていた。周防の戦国大名

であった大内義興が永正五（一五〇八）年、將軍足利義植に仕えて京都に入った際に、小笠原長隆もその軍に加わり入京した。長隆は射御（弓術と馬術）に長けていたので、京都での「犬追物」（馬に乗って犬を矢で射る競技）に出場した。そこで第三位になった長隆が、恩賞として將軍義植から譲り受けた物が「猿頭の玉枕」である。

小笠原氏の居城である温湯城（温泉城・抽勇城とも書く）は、もとは川本駅から東南へ約五キロの山上にあった。しかし永禄元（一五五八）年、毛利元就による攻撃をうけ、翌年温湯城は落城した。このとき、城の近くにあった小笠原氏の菩提寺の廣波寺も焼失。寺は宝重山に移転し、名前も新しくなった。これが現在の長江寺である。このような因縁で、「猿頭の玉枕」は今でも長江寺に納められて



■長江寺の吉村ご夫妻。

いるのである。

「猿頭の玉枕」や歴史について勉強不足で、何を質問すればいいのかわからなかった私に、吉村ご夫妻は丁寧に説明をしてくださった（ありがたうございました！）。だが資料が乏しく、ご夫婦も知らないことがたくさんあると言っておられた。そこでやはり、猿でまちおこしをしてもらえる三宅幸恵さんのところに行くよう勧められた。「あの人は猿に取り憑かれとるけえ……」

猿に取り憑かれた女

三宅幸恵さんは、町の有志で結成された「株式会社ドリムかもん」の取締役兼現場スタッフとして活躍している。私



■（上段）バクのかぶり物をかぶる三宅さん。（下段）きBAKUねつとの商品。

たちは、三宅さんにお会いするために、「道の駅インフォメーションセンターかわもと」へ向かった。迎えてくださった三宅さんは、私たちに「ちよっと待ってね！」と言い残し、走り回っておられた。お忙しいところお邪魔してすみませんでした！

三宅さんは十五歳まで川本町で過ごし、その後、松江市に引っ越した。小学校教員を四年間、退職後は主婦として生活していたが、二〇〇三年から起業家スクールに通い始める。二〇〇四年八月、起業家スクールで発表するビジネスプランを模索している最中に、インターネット上で「猿頭の玉枕」のことを知ったそうだ。「川本の街が猿の光と愛、夢と希望

で満ち溢れる気がした。川本の街が輝いて見えた。もうこの日から獺博士になるうという勢いで！ 獺に取り憑かれて（笑）」と、当時のことを思い出し、いきいきと話しておられた。

十五歳まで川本に住んでいたのに、獺のことを今まで全く知らなかった自分。こんな面白いものが誰にも知られず埋もれていたなんて！ 衝撃を受けた三宅さんは、すぐに友人に電話をかけて「獺頭の玉枕」について聞いてみたが、知っている人はいなかったそうだ。

「悪い夢を食べてくれる」という獺の伝説から、三宅さんは「夢おこし」というキーワードを思いついた。二〇〇四年八月二十八日、獺と出会ったこの日は三宅さんにとって一生忘れられない日となった。

猪突バク進！

三宅さんにとつての喜びは「人と人が出会って新しいものができること」。たくさんの人との縁に支えられ、三宅さんは日々「夢おこし」に邁進している。三宅さんの「川本町を元気にしよう！」と



■バクの形の麦芽クッキー。道の駅で販売されている。



いう熱意、バ イタリテイあ ふれる人柄を見ると、地域の人びとも協力せずにはいられない気持ちになるのだろう。三宅さんは多くの縁を自分から手繰り寄せている。



川本町のモノづくり産業の発展や地域の振興に貢献することを目的に活動している、「きBAKUねっと」というグループがある。モノづくりという縁で集まった個人や団体によって、二〇〇六年三月に設立された。「きBAKUねっと」の「き」は、やる気・本気・元気・勇氣・希望の「き」。このグループのメンバーは、陶芸、木工製品、絵画に取り組んだり、羊毛や布などでモノづくりをしたりしている人びとだ。道の駅で販売されているバクのマスコットなどは、川本町産の羊毛で作っているそう。ちなみに、価格は五八九円。「ご利益」の語呂合わせである。

モノづくりが好きで、行動力や探究心

が旺盛な三宅さんは、様々な活動に取り組んでおられる。「母恵夢BAKU」は、バクグッズの企画製作・販売をする個人事業。また、三宅さんは「NPO法人 夢えつとネットかわもと」の理事長も務めている。二〇〇三年九月、松江市に住んでいた三宅さんは、川本町に通いながらこの団体を設立し、川本町のまちづくりに尽力している。

以前、ゼオライトを漉きこんだ和紙でバクの枕を作ったことがあるそう。しかしその商品は、洗濯が出来ないということでお蔵入りに……。これから改良したい！」と意気込んでおられた。

ある日、東京の方から三宅さんに電話が入った。その方のご家族の中に、夢にうなされて眠れない人がいるのでバクのグッズを送ってほしいとのことだった。「バクのおかげでその方が少しでも不安を取り除くことができたらい。バクにすがってもらいたい」と、三宅さんは話しておられた。

「高齢化四五%、人口三八〇〇人の町の挑戦。へしゃげそう（つぶれそう）になりながらも頑張ってます」と三宅さん。「自分たちが諦めたらもう終わり」という起業家スクール時代の先生の教えをいつも忘れないようにしているそう。三宅さんのブログによく書かれ、取材にもよく登場した「猪突バク進」という言葉。いつ



もパワフルな三宅さんの代名詞である。三宅さんは今日も、夢に向かって猪突バク進している。

今回の取材で、川本町の豊かな自然と人の良さに触れることができた。私が川本町に住んでいた頃は、自然があることや人が優しいことに慣れてしまっていて、それが当たり前のように感じていた。しかし、それは当たり前のことではなく、とても特別なことであり、川本町の良さであると再発見できた。

川本町が獺の町であることは、まだまだ知られていない。しかし三宅さんとお会いして、これからは獺を通して人と人のつながりが広がり、川本町がより元気になっていくと確信することができた。人口三八〇〇人の小さな町から世界へ、元気が発信され続けていくことを願って、川本町を後にした。

（やまうち・ちえ／日本語文化系二年生）

